

## CA1751

## 動向レビュー

「エンベディッド・ライブラリアン」：  
図書館サービスモデルの米国における動向

## 1. エンベディッド・ライブラリアンとは

あるものをなにかに埋め込む、という意味を持つ“embed”という語を用いた、エンベディッド・ライブラリアン (embedded librarians) と呼ばれる図書館司書、またはエンベディッド・ライブラリーサービスというサービス提供の形態が、近年米国の図書館界で一つの潮流となっている。このテーマについては論文に加え、米国カトリック大学 (Catholic University of America) 図書館情報学准教授のシュメイカー (David Shumaker) 氏といった人物がブログでも積極的に発信している<sup>(1)</sup>。この呼称は、2003年のイラク戦争で広く知られるようになった、エンベディッド・ジャーナリスト (embedded journalists) に由来している<sup>(2)</sup>。これらのジャーナリストは、戦闘部隊と行動をともにし、進行中の事件の内部から取材活動を行い、自らをこのように呼ぶようになったとされている<sup>(3)</sup>。彼らは自らを部隊に「埋め込んだ」ことによって、事件のストーリーに直接アクセスできることができた<sup>(4)</sup>。このことから、エンベディッド・ライブラリアンとは、日常の業務において、図書館を離れ、利用者が活動している場から、利用者と活動をともにしつつ情報サービスを提供している図書館司書を指す。

この、「埋め込まれて」いる程度には様々なものがある。図書館司書がどの程度「エンベッド」されているかを計る目安としては、普段ほかの図書館司書と同じ場所で業務をするのか利用者とおなじ場所にいるのか、給料・諸経費は図書館と利用者のどちらに充てられた予算から出ることなのか、誰が司書の監督・業務評価をするのか、主に利用者たちの会議に参加するのか、または図書館での会議に参加するのか、といったものがある<sup>(5)</sup>。こういった組織、人員配置、業務形態からみた目安でいえば、図書館司書が、図書館から離れて利用者たちと一体となり、利用者側から予算を充てられてサービスを提供しているケースがあれば、それはより高度なかたちでのエンベディッド・ライブラリアンともいえる。

エンベディッド・ライブラリアンというモデルの重要な点は、図書館司書が、利用者の環境に自分を「埋め込み」、利用者として作業等で協働し、混じり合うことによって、利用者の行動、またそれによる利用者の情報、情報サービスに対するニーズをより直接的に知り、より迅速なサービスをその場で提供できることにあり<sup>(6)</sup>。利用者の置かれた環境や状況によって、必要と

される情報の内容、情報と向き合うコンテキスト、プロセスは異なってくる。そこに、このエンベディッド・モデルを導入することで、特定の利用者集団のニーズに沿うようにカスタマイズされた、より付加価値の高いサービスを提供できる効果がある<sup>(7)</sup>。

そして、今日電子ジャーナルや電子書籍、その他図書館の様々なサービスが、図書館を訪れる必要がなくオンラインで利用できるようになってきていることで、図書館司書も、図書館を離れて利用者のいる環境の下でサービスを提供するのは必然となっていくともいえる。仮に利用者が必要とするほとんどの資料がオンラインで入手でき、もしくはオンラインで入手できるものしか利用しなくなり、図書館という場所を必要としなくなった場合でも、図書館司書は利用者のいる場所にエンベッドされ、どのようにリサーチを始めたら良いか、どのように情報を探したら良いか、情報をどのように評価したら良いか、といった局面で利用者を支援することができる<sup>(8)</sup>。このように、より多くの情報がオンラインで入手できることになったことで、図書館司書の居場所が図書館である必要性が減少したことが、より利用者に近づいた環境でサービスを提供することが効果的であるという、エンベディッド・ライブラリアンというモデルを後押ししているといえる。

## 2. 「埋め込まれる」環境

エンベディッド・ライブラリアンは、利用者の属する環境のもとでその利用者のニーズに即した様々なサービスを提供し、その内容は図書館の種別、図書館の対象とする利用者によって異なる。例えば専門図書館の分野では、司書として利用者の作業に参加しつつ利用者に貢献する、利用者の専門分野での会議、セミナー等に参加する、利用者のオフィス等で情報利用や情報管理等の研修を行ったり、利用者によるウィキやウェブ上のワークスペースに参加したりすることがある<sup>(9)</sup>。先述のシュメイカー氏は、例えば大学図書館では、学生への利用教育が重視されるかもしれないし、企業図書館では、マーケティングや企業の運営、意思決定等に関わる外部情報の収集、分析のためのリサーチ、または企業内情報の管理等が重視されるであろう、としている<sup>(10)</sup>。そして、図書館司書がそういったサービスを提供する場合は、企業であれば業務を行う部課であり、大学では研究者がいる場所、また学生が集まる場所である<sup>(11)</sup>。

エンベディッド・ライブラリアンというモデルは、主に専門図書館、または大学図書館で多く取り入れられている。公共図書館等への応用も示唆されているが、今のところは、サービス対象を限定・特定しやすい、大学・専門図書館の方がなじみやすいとされている<sup>(12)</sup>。

このモデルは、医学系図書館でより積極的に取り入れられ、エンベディッド・ライブラリアンという呼称が広まる以前から、いわゆるクリニカル・ライブラリアン (clinical librarians) と呼ばれる臨床専門の図書館司書が、臨床医の必要に応じて、選別した情報を逐一提供すること等を行ってきた<sup>(13)</sup>。アリゾナ大学のヘルスサイエンス図書館では、公衆衛生学部担当の図書館司書は、95パーセントに近い勤務時間を学部内で過ごし、研究助成金申請のための調査、学生および教員への情報リテラシー教育を行い、学部の会議にも参加している<sup>(14)</sup>。医学系以外の専門図書館でも、このモデルは比較的早くから取り入れられ、一つの例として、政府関連の研究開発に携わる非営利法人、MITRE Corporationにおいて2002年から図書館司書がシステムエンジニアリング部門に配属され、そこで技術文献の管理等の情報サービスを提供している<sup>(15)</sup>。

大学図書館でのエンベディッド・ライブラリアンのモデルは、学生向けの情報リテラシー教育に積極的に応用されている。多くの大学図書館では、以前から図書館司書と教員とがパートナーとなって、特定の授業に、その内容に沿ったかたちで情報リテラシー教育を取り入れてきた。こういった例のひとつとして、カリフォルニア大学バークレー校 (University of California, Berkeley) での環境学の授業において、あるテーマに関する情報の探し方等の授業内容、学生への課題の作成等を図書館司書と教員が共同で行ってきた事例がある<sup>(16)</sup>。

とりわけ、オンライン学修支援システムを用いたオンライン授業の増加に呼応して、図書館司書が学修支援システム上で、学生の授業に関連する諸活動をモニターし、参加する形がよく見られる。例えば、オハイオ州のマイアミ大学 (Miami University) ミドルタウンキャンパスでは、ウェブ上での授業を倍増する計画に対応して、2009年から、図書館司書がオンライン学修支援システムのひとつである“Blackboard”で13の授業に参加して、情報リテラシー教育を提供するパイロットプログラムを始め、教員から学生の情報リテラシー能力が向上したとの評価を受けた<sup>(17)</sup>。また、アラバマ州のアセス州立大学 (Athens State University) では、図書館司書がティーチング・アシスタントとして“Blackboard”上で、授業シラバスや課題にアクセスし、図書館司書への質問コーナーの開設、学生が授業で必要とする情報・教材のアップロード、学生同士のフォーラムでの議論の内容に即したアドバイス等を行っている<sup>(18)</sup>。

こういった、大学での情報リテラシー教育へのエンベディッド・モデルの導入には、それまでは学期を通して一度、関連の授業を行うことで終わりがちだった

情報リテラシー教育を超えて、より授業科目全体の一部となり、学生が学習を進める過程の中で必要な時点で、必要な内容の情報探索、利用等の援助をしようという意図がある。さらには、授業ではなく大学の学生寮において、図書館司書が学生の生活の場から学生の学習を支援する、というアプローチも見られる<sup>(19)</sup>。

また、大学、研究機関では、パデュー大学 (Purdue University) のように、エンベディッド・ライブラリアンが研究プロジェクトの一員となって、研究者の研究内容とその進展、その都度の情報ニーズを直接把握し、サービスを提供する動きがある。また、従来の図書館司書は、書籍や雑誌論文等、研究過程での最終成果物の組織、提供に主に関わってきたが、研究プロジェクトにエンベッドされることによって、研究そのものに最初の段階から参加し、研究で生み出されたデータの管理、データの研究プロジェクト外への発信または長期保存のための組織化等に従事することができる<sup>(20)</sup>。

### 3. 既存のコンセプト、モデルとの関係

エンベディッド・ライブラリアンの背景にある考え方は、必ずしも近年突如として現れたものではない。エンベディッド・ライブラリアンというサービス形態をどのように捉えているかにもよるが、専門図書館協会 (Special Libraries Association) が2007年に行った調査では、60パーセントの回答者が、所属している機関ではこのようなサービスが10年以上前から行われている、としている<sup>(21)</sup>。先に述べたように、医学分野での図書館サービスは、エンベディッド・ライブラリアンという呼称が広まる以前から、その要素をもっていた。

大学図書館では、以前から“subject specialists”と呼ばれる主題専門司書が、専門とする学問分野に特化したサービスを提供してきた。また主題専門司書を主とした、学部、学科等と連携したサービスに主眼を置く図書館司書は、リエゾン・ライブラリアン (liaison librarians) とも呼ばれてきた。このような図書館司書は、主題専門知識を活かして教員とパートナー関係を築き、情報リテラシー教育をカリキュラムや授業の中に組み込む、といった活動を行ってきた。大学図書館のエンベディッド・モデルは、こういったモデルの延長線上にあるとも考えられるが、以前のモデルとの違いとして次の点が挙げられる。主題専門司書、リエゾン・ライブラリアンには利用者とのパートナー関係を構築し、レファレンス、情報リテラシー教育を担当しつつも、業務のうちの大きなウェイトを、図書館での情報資料の選択や管理に充てている。また、利用者とのパートナー関係から利用者のニーズを取り入れながらも、それはあくまでも図書館の蔵書構築や図書館

サービスに反映させる、という図書館側の意識が見られる。これに対して、エンベディッド・モデルには図書館の目的というよりも、より利用者が持つ目的達成に共同参加する、という理念がある<sup>(22)</sup>。

#### 4. エンベディッド・モデルが効果をあげるためには

エンベディッド・ライブラリアンとして図書館司書個人に求められる資質には、図書館を離れた新しい環境・経験に臨機応変に対応することができること、今までの図書館での形式にとらわれない、オープンな思考を持っていること等がある<sup>(23)</sup>。そして、エンベディッド・モデルが効果をあげるための重要な要素として、利用者とより一体となるような密接な関係を作り上げることがある<sup>(24)</sup>。

エンベディッド・モデルでは、図書館司書は利用者に、よりカスタマイズされた高レベルのサービスを提供するため、そのために費やす時間と労力は増え、また図書館を離れて利用者と交わる時間も多くなる。こういったことを図書館の経営側が理解する必要がある。エンベディッド・モデルを導入し、エンベディッド・ライブラリアンを支援するためには、図書館はエンベディッド・ライブラリアンとしての資質を備えた人材を採用・養成し、図書館司書が利用者との関係を深め、対象とする利用者集団の活動内容、専門分野、または彼らが属する組織への理解を深めることを奨励すべきである<sup>(25)</sup>。そして、図書館内部での組織や業務慣行等にとらわれず、図書館司書を、図書館外の利用者がいる現場で活動させる体制を整えることが重要となる。さらには、図書館は利用者が属する組織と連携し、エンベディッド・ライブラリアンの業務を、利用者への効果の面で利用者側から評価してもらい、利用者が属する組織からもエンベディッド・モデルへの支持を得ることが、成功へとつながるとされている<sup>(26)</sup>。

エンベディッド・モデルは、特定分野の小規模な図書館においては、その専門性、臨機応変さを活かして比較的容易に導入できるが、大規模な大学図書館では、多数のそれぞれ専門が異なる利用者に対応しなければならず、その広範囲な導入は容易ではない<sup>(27)</sup>。先のパデュー大学のように、図書館全体でこのモデルを導入して行く試みはあるが、多くの大学図書館では、少数の司書がいくつかの授業でこのモデルを導入しているのが現状のように思われる。ペンシルバニア州のバックス郡コミュニティーカレッジ (Bucks County Community College) における、オンライン学修支援システム“WebCT”をもとにした導入例では、エンベディッドされた図書館司書がオンラインチャット等で学生に個別にサービスを提供することに加えて、オンラインチュートリアルや、多くの大学図書館で取り入れられ

ているスプリングシェア社 (Springshare LLC.) の図書館向けウェブプラットフォーム“LibGuides”を学修支援システムにリンクさせている。これらを援用することで、より多くの学生に効率的、効果的に情報リテラシー教育のコンテンツをオンライン上で提供しようとする試みが行われている<sup>(28)</sup>。デューク大学 (Duke University) でも同様の事例が報告されている<sup>(29)</sup>。このように、規模の大きい大学図書館ではエンベディッド・モデルを取り入れつつも、どのように多数のクラス、学生に効果的、効率的に浸透させられるか、ということも今後の課題となるであろう。

(アリゾナ大学：鎌田 均)<sup>かまだ ひとし</sup>

- (1) 例えば以下のブログがある。  
Shumaker, David. Embedded Librarian.  
<http://embeddedlibrarian.wordpress.com/>, (accessed 2011-06-23).
- (2) Hedreen, Rebecca. “Embedded Librarian”. Frequently Questioned Answers. 2005-04-29.  
<http://frequentq.blogspot.com/2005/04/embedded-librarians.html>, (accessed 2011-06-22).
- (3) Becker, Bernd W. Embedded librarianship: A point-of-need service. *Behavioral & Social Sciences Librarian*. 2010, 29(3), p. 237-240.
- (4) Hedreen, Rebecca. “Embedded Librarian”. Frequently Questioned Answers. 2005-04-29.  
<http://frequentq.blogspot.com/2005/04/embedded-librarians.html>, (accessed 2011-06-22).
- (5) Shumaker, David. Who let the librarians out? Embedded librarianship and the library manager. *Reference & User Services Quarterly*. 2009, 48(3), p. 239-242, 257.
- (6) Kesselman, Martin A. et al. Creating opportunities: Embedded librarians. *Journal of Library Administration*. 2009, 49(4), p. 383-400.
- (7) Shumaker, David. A wide range of approaches: Embedded library models vary in format but share a common focus on delivering customized services to clients with well-defined needs. *Information Outlook*. 2010, 14(1), p. 10-11.
- (8) Siess, Judith. Embedded librarianship: The next big thing?. *Searcher*. 2010, 18(1), p. 38-45.
- (9) Kho, Nancy Davis. Embedded librarianship: Building relational roles. *Information Today*. 2011, 28(3), p. 1, 35-36.
- (10) Shumaker, David. A wide range of approaches: Embedded library models vary in format but share a common focus on delivering customized services to clients with well-defined needs. *Information Outlook*. 2010, 14(1), p. 10-11.
- (11) Siess, Judith. Embedded librarianship: The next big thing?. *Searcher*. 2010, 18(1), p. 38-45.
- (12) Shumaker, David. Who let the librarians out? Embedded librarianship and the library manager. *Reference & User Services Quarterly*. 2009, 48(3), p. 239-242, 257.
- (13) Konieczny, Alison. Experiences as an embedded librarian in online courses. *Medical Reference Services Quarterly*. 2010, 29(1), p. 47-57.
- (14) Freiburger, Gary et al. Embedded librarians: one library's model for decentralized service. *Journal of the Medical Library Association*. 2009, 97(2), p. 139-142.
- (15) Moore, Michael F. Embedded in systems engineering: How one organization makes it work. *Information Outlook*. 2006, 10(5), p. 23-25.
- (16) Kobzina, Norma G. A faculty-librarian partnership: A unique opportunity for course integration. *Journal of Library Administration*. 2010, 50(4), p. 293-314.  
<http://www.tandfonline.com/doi/abs/10.1080/01930821003666965>, (accessed 2011-07-08).
- (17) Tumbleton, Beth E. et al. When life hands you lemons: Overcoming obstacles to expand services in an embedded librarian program. *Journal of Library Administration*. 2010, 50(7/8), p. 972-988.
- (18) Herring, S. D. et al. Reaching remote students. *College & Research Libraries News*. 2009, 70(11), p. 630-633.

<http://www.ala.org/ala/mgrps/divs/acrl/publications/crlnews/2009/dec/reachremote.cfm>, (accessed 2011-07-08).

- (19) Long, Dallas. "Embedded right where the students live: A librarian in the university residence halls". *Embedded Librarians*. Kvenild, Cassandra et al., eds. Chicago, Association of College and Research Libraries, 2011, p. 199-209.
- (20) Carlson, Jake et al. *Embedded librarianship in the research context: Navigating new waters*. *College & Research Libraries News*. 2011, 72(3), p. 167-170. <http://crln.acrl.org/content/72/3/167.full.pdf+html>, (accessed 2011-07-08).
- (21) Shumaker, David et al. *Models of embedded librarianship: A research summary*. *Information Outlook*. 2010, 14(1), p. 26-28, 33-35.
- (22) Shumaker, David. *Who let the librarians out? Embedded librarianship and the library manager*. *Reference & User Services Quarterly*. 2009, 48(3), p. 239-242, 257.
- (23) Abram, Stephen. *Openness and the library experience*. *Information Outlook*. 2010, 14(1), p. 53-54.
- (24) Shumaker, David. "Beyond instruction: Creating new roles for embedded librarians". *Embedded Librarians*. Kvenild, Cassandra et al., eds. Chicago, Association of College and Research Libraries, 2011, p. 17-30.
- (25) Shumaker, David et al. *Models of embedded librarianship: A research summary*. *Information Outlook*. 2010, 14(1), p. 26-28, 33-35.
- (26) Shumaker, David et al. *Models of embedded librarianship: A research summary*. *Information Outlook*. 2010, 14(1), p. 26-28, 33-35.
- (27) Kolowich, Steve. "Embedded Librarians". *Inside Higher Education*. 2010-06-09. <http://www.insidehighered.com/news/2010/06/09/hopkins>, (accessed 2011-06-14).
- (28) Hemmig, William et al. *The "just for me" virtual library: Enhancing an embedded ebrarian program*. *Journal of Library Administration*. 2010, 50(5/6), p. 657-669.
- (29) Daly, Emily. "Instruction where and when students need it: Embedding library resources into learning management systems". *Embedded Librarians*. Kvenild, Cassandra et al., eds. Chicago, Association of College and Research Libraries, 2011, p. 79-91.

## CA1752

### 動向レビュー

## 学校・学校図書館を取り巻く新しい読書活動 —集团的・戦略的読書の視点から—

### 1. 学校・学校図書館の読書活動の背景と概要

#### 1.1. PISA 型読解力への注目

近年の学校教育における読書活動を考えるためには、新学習指導要領<sup>(1)</sup>を押さえておく必要がある。新学習指導要領には、「思考力・判断力・表現力等」を育むことを目的とした言語活動の充実が盛り込まれ、それを支える条件として、読書活動の推進、学校図書館の活用や学校における言語環境の整備の必要性が示された<sup>(2)</sup>。言語活動の充実が設定された理由の一つには、経済協力開発機構 (OECD) による学習到達度調査 (PISA) によって、日本の子どもたちには「思考力・判断力・表現力等」を問う読解力問題に課題があると判明したことが挙げられる。いわゆる PISA 型読解力<sup>(3)</sup> (CA1671, CA1703, CA1722 参照) に課題があったことの影響は大きい。そのため、学校現場では PISA 型読解力の育成への関心が高い。

また、新学習指導要領には「生きる力」の育成を目的に「探究的な学習」の推進も明記されるようになった。グローバル化が進んだ「知識基盤社会」に必要な能力を育成するために、批判的に考えたりコミュニケーション力をつけたりするなどの学習活動を行う。そこでは PISA 型読解力とも密接なクリティカル・リーディングなどの読書技術が必要となる。

こうした状況のもと、学校および学校図書館では、読書活動と PISA 型読解力の育成とを密接に関係付けて考えることが増えている。

#### 1.2. 一人読みから集団での読書へ

PISA 型読解力の育成という命題があるなかで、近年の学校および学校図書館では、読書会のようにグループで読書をする集团的読書活動への注目が集まりつつある。読書を個人のものにとどめるのではなく、グループで行い共有していこうとする動きである。読書会での交流は、読書感想文や読書感想画とは違い、一方通行の発信にとどまらないところに、読書指導としての優位性がある。複数で同じ本を読んで感想や意見を話し合うことで、深く読み取ったり共感したり、意外な発見ができたりするなど、読みの世界が広がるのが期待されている。読書生活<sup>(4)</sup>を豊かにするだけでなく、コミュニケーション能力を養うことにもつながる<sup>(5)</sup>。

現在注目されている集团的な読書活動は、「読書へのアニメーション」、「ブッククラブ」、「リテラチャー・